

五月二七日（土）

月末の土曜日、久しぶりにのんびり出かけようと思っていたのに、急に沙綾から連絡があったために、自宅でゆったりと本を読んでいる。数日前までは晴れ予報だったのに、前日の予報では曇りのち雨だから丁度いい。

窓の外は雨がパラつき始める中、私のいるリビングでは雨の音なんか微塵も聞こえず、キッチンで悪戦苦闘している沙綾の建てる音が響き渡っている。永らく積んでいた本を紐解いて、読書に集中して読み切りたかったのに、娘のドタバタが気になってしまう。顔を上げ、沙綾の様子を眺める。

「オーブンだったら、あっちの家にもあるでしょう？ レシピは貸してあげるから、自分の家でやったら？」

「ダメダメ。現地のオーブンとキッチンがシミュレーションできなきゃ、意味ないでしょ？」

沙綾はレシピ本をジッと睨みつけながら、薄力粉をふるいにかけている。お昼を食べたばかりだけど、今からその段取りで、夕方までにケーキなんて出来上がるのかしら。

「もっと簡単なクッキーだつて載ってるでしょ？」

「せっかくの誕生日なのに、クッキーじゃ現地で作る意味ないじゃない？」

沙綾は私の提案を突っぱねて、作業に戻る。

「あなたがわざわざケーキを作ろうだなんて、よっぽど大事なお友達なのね」

最近懇意にしている、歳が少し離れたお友達。仕事仲間でもあり、将来の義理の妹かもしれない、可愛い妹分。沙綾は私の茶々を完全にシャットアウトして、ケーキ作りに没頭している。辿々しい手つき、細かいことが苦手そうなのもよく分かる。一緒に暮らしていた時も、せいぜい簡単なチョコ菓子を作る程度だったし、今も料理なんてそんなにしてないんだろう。一輝さんは普段、どんなものを食べているのか、他人事ながら可哀想な気もしてくる。

沙綾は、ボーッと彼女を眺めていた私の顔を見ながら、「なに？」と聞いてきた。私は「なんでもない」と首を振る。

「お手伝いしましょうか？」

「ありがとう。お気持ちだけいただいでおくわ」

本当にケーキなんか出来上がるのか心配だったけど、本を読みながら覗きにくくと、少しずつそれっぽいものに近づいていく。レシピ本の通りではなさそうだけれども、彼女らしいアレンジが効いていて、不格好なりに美味しそうな気がする。

上手に焼き上がったスポンジを切り分け、間にフルーツを挟んでクリームを塗っていく。美味しそうな匂いに、遠くでケビンが切なそうに声を上げる。彼にオヤツを上げてから、もう使わなさそうな調理器具を洗っていく。

あらかた片付いたら、コーヒーマーカーを動かして、エスプレッソを入れる。沙綾はそれらしいケーキが出来上がったところで満足して、試食のセッティングにまで気が回らない。私があればこれ段取りしてやって、やつとお皿に切り分けるところまで来た。

「この、残りはどうするの？」

「お母さんが食べればいいんじゃない？」

そこそこしつかりした手作りのホールケーキ。二切れ食べたところで、まだまだたつぷり残っている。

「適当にラップするから、持って帰りなさい」

「えー、めんどくさい」

「いいから。あの彼氏にも食べさせなさい」

私はとりあえず、残りのケーキにラップをかけて、食卓につく。フォークを手に、「いただきます」と一口食べる。甘さ控えめと言えば聞こえはいいけど、単純に甘みが足りない。

「ちゃんと計って作らないと」

「いやあ、失敗、失敗」

彼女は舌を出して可愛らしく言った。

「じゃあ、もう一回だ」

え、まだ作るの？ もうそろそろ夕方の散歩に出かけて、夕飯の段取りをしたところなのに、沙綾は私の予定を考慮する気など微塵もなさそうで、やる気満々な表情で自分のお皿に乗ったケーキを食べていく。ちよつぱり鬱々とした気分になりながら、本なんて読まずに陰ながらお手伝いしなくてはと、密かに決めた。

初出 令和三年五月二八日
P182にて公開